

4 古典・現代建築歴訪の旅

4.3 ドイツ、オーストリアの建築



ドイツ表現派を代表するテリビルデング、ハンブルグ。ヘーガー設計1922年。

恐怖の思いが頭の中を駆けめぐっていた。30分くらいすると、二人の軍人がもどってきたが、長く感じられた時間であった。なおみは意外と楽観的で、なる様になるからという気持ちで待っていた様であった。ドイツ語か英語かわからないが早口で言われた。パスポートを返してくれて、“ゴー！”と言うことは理解できた。うれしかった。

逃げる様にしてベルリンを去り、アウトバーンを必死に走り続けた。ガソリンがある限りアウトバーンを走り続けた。一晩中走っていた気もする。ケルンの街に着いた。黒いタワーが2つ突き出ている巨大なケルン大聖堂が眼に入った。この街で一休みし、心をおちつける事にした。公害でなったのか、デコボコに飛び出している詳細の塔の屋根が真っ黒になっていた。巨大な建物だけに何か圧迫される感じであった。ライン川・ネッカー川沿いのぼり、川に沿って丘の上に残る古い城々を見学しながらハイデルベルグに向った。心が落ち着いたのか川の両側にある古い



ケルンの大聖堂、ドイツゴシック建築の代表作

ハイデルベルグの古城、川の両側の山から川を見下ろすように崩れかけた古城が彫刻のように立ち並んでいる





空調の噴出し口、超現代的な詳細



半透明のガラスに包まれた空間、郵便貯金局、ワグナーの設計、1906年

城や建築そして、街が美しく、平和を感じられた。古い崩れかけた城でさえ大変美しく見えた。ハイデルベルグはドイツで最も美しい街と言われ、多くの芸術家たちに愛された街である。それから、再度アウトバーンにのりオーストリアのウィーンに向かった。

ウィーンの街には私の好きな建築家オットー・ワグナーの建築が沢山あった。彼の作品を探して見てまわった。本の写真で見るとはるかに郵便貯金局のガラスでつまれたホール空間は美しく、感激した。曲線で形とられた曇りガラスの全体の屋根、天井、それに全体の床がガラスブロックで造られて、やわらかい光が屋根の上から地下室まで抜けていくようであった。床から突き出しているメタルで作られた空調の吹き出しのシリンダーは、詳細といえプロポーションといえ現代建築の美しさそのものであった。忘れることの出来ない建築空間のひとつである。

それにもうひとつ、ウィーンの街にちょっとしたリボリューションをおこした小さな建築がある。それを探した。それは、ハンス・ホーラインが1960年代に設計したレッティーのキャンドルショップである。こんなにも超現代的なデザインの店を歴史を重んじる保守的なウィーンの街の中世の建築が並ぶ中につくられたものだと、その才能以上に、これを創った勇気に驚かされた。彼の性格であっては当然のような気がするが。

ベートーベンやモーツァルトなどの有名な音楽家の銅像が公園のあちらこちらに見うけられた。サウンドオブミュージックの舞台に

ワグナーの自邸、設計1900年
装飾のタイルやディテールが大変きれいであった。



中世建築に嵌め込んだ超現代的な
キャンドルショップのファサード
ホーライン設計、1969年



なったサルズバルグを見て、再びドイツ入りし、ミュンヘンに向かった。

そして、ハンス・ホーラインの事務所を訪ねた。彼は親切に向かい受けてくれた。そして彼の最近の作品である、完成してまもない隣の町役場の建物に案内してくれた。彼の設計した建物の細部は繊細で、本当に美しい。良い建築を見ているといやなことを忘れる。先日のあの恐怖の事件も忘れていた。

その後、シュタッドガルト市に建っているワイセンホフ・ジードルンクと呼ばれる（現代建築デザイ



大理石の葡萄が盛り上がっている彫刻床、葡萄で有名な町の町役場の会議室、ハンスホーライン設計、1976年



ワイセンフォルフの集合住宅のひとつ、ミース設計 1927年



自然の傾斜地に建つ高密度のハーレンのハウジング、スイスアトリエ5設計、1967年

ンの基盤となった) 集合住宅を見に行った。1920年代の設計であるが、今の建築のスタイルとまったく変わっていないフレッシュな感じであった。当時の著名な建築家達を選ばれて、設計した住宅群で、インターナショナルスタイルと呼ばれる建築の住宅が出来上がったのである。個々の住宅の中に入る事が出来なかったのも、その住宅地域を何度も何度も歩きまわった事を思い出す。

1920～30年代のドイツの建築は、バウハウスをはじめとして、現代建築デザインの先端をいっていた。その後バウハウスの多くの著名な建築家達はナチスの迫害をのがれて、アメリカに亡命した。

私は自分がつくったリストにしたがって、ドイツの街々の建築を視察し、スイスに行った。チューリッヒに入り高密度のハーレンの集合



**この車でヨーロッパ全土を走りまわった。追突の事故に一度あった。
車ごと貨車に乗せられてアルプス山脈の長いトンネルを抜けた。
トンネルを抜けるとそこは魔の峡谷であった。**

プスの麓の街に行って、他にイタリアに抜ける道はないか、と尋ねまわった。隣のロザンの街から、自動車ごと汽車に乗せてアルプスのトンネルを抜けてイタリア側に行ける汽車が出ていると話を聞いた。トンネルを抜けると、イタリア側は暖かいから雪がないかもしれない、という話であった。その方法でアルプスの山を越えることにした。車ごと、屋根のない荷物車の様な汽車に乗って、アルプスのトンネルを抜けた。異様な感じであった。トンネルをぬけると、ないはずの雪があり、そこは雪国であった。多くの客はスキー客で、スノータイヤやチェーンをつけていた。私の車はスノータイヤもなく、タイヤのチェーンもない。その汽車はそれ以上先に行かないという。アイスバーンとなっている坂道をスキーヤー達がドライブする車の後について、ゆっくりと下った。片側は絶壁であり、片側は千尋の谷である。谷底から吹き上げくる突風に見舞われた。血の凍るような思いだった。すべての車が停まり、積んでいたスキーを下ろしてタイヤの前におき、強風によって車が動くのを防ごうとしていた。このままでは動きがとれない、なおみを車に一人残して近くの山村の店にタイヤに付けるチェーンを探しに行った。走る様にして、ある店々、そして民家まで訪ねた。凍結している道で滑って転んで大きくひっくり返った。痛いはずだったが何も感じられなかった。ずいぶん探したがチェーンは見つけれなかった。しかたなく車の所に戻った。他の車は動き何処かに行ってしまった。恐怖に慄いた様に青い顔をしたなおみが乗っている小さな車が一台残されているだけだった。私も車も、硬直していて、動くのが恐ろしかった。悪夢の時であった。

住宅やいくつかのル・コルビュジェの作品を見た。そして、ジュネーブに行った。その街からアルプス山脈を車で越えてイタリアへ行く予定であった。しかし、その年は例年になく早く雪が降り、アルプス越えの車道は来年の春まで通れない、という。アルプスの西側を通過してイタリアに行く方法があるが、そうすると私の旅のスケジュールが大幅に狂ってしまう。アル